

データサイエンス学修プログラム 令和3年度自己点検・評価

自己点検・評価の視点	評価総括	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
<b>学内からの視点</b>		
プログラムの履修・修得状況	要改善だが、初年度としては良好	プログラム開始初年度である令和3年度は、本学の収容定員5490人(入学定員1310人)に対して20名が本プログラムを受講した。収容定員に対する履修率は約0.4%であることから要改善である。しかし、プログラム履修者の約4割が2年生以上であり、1年次～4年次すべての学年の学生が履修した。改組の年次進行中である工学部を除く人文、教育、医、生物資源学部の全学部学生が受講していること、プログラム履修生の約8割が単位を修得することができていることから、履修率は要改善だが、履修状況は初年度としては良好と判断した。
学修成果	概ね良好	プログラム修了要件の第2科目である現代科学理解特殊講義の授業アンケート(1-5点評価)を分析した結果、「新しい知識の習得」は4.2、「学業への興味・関心(意欲)の高まり」は3.7と、データサイエンスという切り口で提供された授業に対して関心を高め知識への興味を喚起できたことがわかった。一方で、「地域への関心の高まり」については1.6であり、全学部全学年の学生を対象とした結果、地域課題に対するターゲットを絞り切れなかったことがうかがえ、改善を要すると思われる。問題点はいくつかあるが、総合的な学修成としては概ね良好と評価した。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	概ね良好	プログラム修了要件の第2科目である「現代科学理解特殊講義」の授業アンケート(1-5点評価)を分析した結果、「理解度」は3.5で平均よりやや高い程度となった。「現代科学理解特殊講義」は全学部の全学年の学生が受講(AC期間の関係でDS I がスタートできなかった工学部はプログラム運用実績数から除した)しており、レベル設定が難しかったため、平均的な理解度にならざる負えなかったものと考えられる。初年度プログラムの成果としては、平均的評価ではあるが概ね良好であると判断した。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	概ね良好と推察	現代科学理解特殊講義の中で受講者が取り組んだ課題(調査発表タイトル)を公表した。授業アンケートの中で直接的に推奨度を問う項目は設けていないが、上述のように「新しい知識の習得」は4.2、「学業への興味・関心(意欲)の高まり」は3.7と比較的高評価であることから、後輩等他の学生への推奨度も高いのではないかと推察される。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	評価対象外 ただし、確実に履修率が向上する制度を導入している	プログラム開始初年度であり、進捗状況としては評価できないが、今年度(令和4年度)から教養教育の科目群として新たに「データサイエンス」領域を新設し、令和4年度から改組の学年進行中の工学部を除く人文、教育、医、生物資源学部の4学部で「データサイエンスⅠ」と「データサイエンスⅡ」の2科目4単位必修化を行っている。今後、順調に履修率向上が達成できると考えられる。
<b>学外からの視点</b>		
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	未実施 (今後実施予定)	今後、3年に1回の割合で卒業生と卒業生が就職した企業など(事業所)に対して行う追跡調査「卒業生・修了生・事業所へのアンケート調査」の中で、「情報機器の活用」「分析する力」「判断する力」「企画する力」「構想する力」など、データサイエンス教育に関わる項目について卒業生からの回答に対して分析を行う。事業所に対しては「情報機器を活用する力」「情報を収集して適切に処理する力」などの項目に対してデータサイエンス学修プログラム実施前後の状況分析を行う予定である。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	未実施 (今後実施予定)	本教育プログラムを修了した卒業生と卒業生の就職先企業に対しての同時調査が可能で体制が整っている。そのため、産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見を収集する予定である。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	積極的な取り組み	平成31年度(令和元年度)から数理・データサイエンス館(通称CeMDS=セムズ館)を開設し、体験型学習と学生同士で問題解決を図るための仕組みとしてCeMDSサポートデスク(大学院生スタッフが学部生の相談に応じる)を運営している。CeMDSでは、3Dプリンタなどの機器や実習・研修スペースなども提供している。さらに令和3年度からはデータサイエンス学修プログラムの周知やデータサイエンスセミナーなど、在学生と教職員への啓蒙活動を行い、数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を大学構成員全員に対して理解してもらうことへの努力を行っている。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	標準的な取り組み	内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすることができるよう、情報教育専門委員会で議論し、令和4年度より各学部で展開されるデータサイエンスⅡの実施に反映させる。